大学出版

'99 冬

No.40

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク

The Association of
Japanese University Presses
大学出版部協会

大学出版
40号

Winter·1999

読書の周辺　『イギリスの地方政府』を考える――大塚　祚保　1

読書の周辺　日本社会の中心と周縁――長谷川公一　6

岐路に立つ大学出版部――渡辺　勲　10
――一九九八年アメリカ大学出版部協会（ＡＡＵＰ）総会に参加して

大学出版部の本の装幀について――小池美樹彦　15

歩く・見る・聞く――知のネットワーク　13――17

大学出版部ニュース――19

新刊案内'98・10～'98・12――28

表紙イラスト　ヨースト・アマン『職人図鑑』より
大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛
〈書籍の価格は本体価格で表示〉

■読書の周辺

『イギリスの地方政府』を考える

大塚　祚保

私は、一九九六年四月から一年間、イギリスのエセックス大学に留学した。イギリスの地方行政、カウンシルの実態を研究するためであった。最近、その成果を『イギリスの地方政府』（流通経済大学出版会刊）として公刊した。

イギリスへの留学が決まり、幾つかの文献を捜してみたが、地方団体、カウンシルの運営実態について書かれたものは、ほとんど見当たらない。イギリスに関する書物は、海外旅行ブームなどの国際化の時代でもあり、数多く出版されているが、特定の専門分野となると、そう多いものではない。行政に関するものは、サッチャー政権による行政改革に関連した数冊があげられるのみである。

前年度に留学した国士舘大学の下條美智彦教授は、『イギリスの行政』（早稲田大学出版部）を刊行した。帰国と同時に出版されたので、その速さに驚きと敬意を表したものである。その内容は、現代イギリスの行政について、国と地方との関係を中心に行政学的アプローチからとりまとめたものであった。「地方」の内容については、大いに参考とさせてもらった次第である。

『イギリスの地方政府』のねらいの一つは同教授の「地方」の部分をより詳細に分析し、イギリスにおける運営実態を明らかにすることであった。そこで、本書の主なる内容は、イギリスのカウンシルであるカウンティ（County）とディストリクト（District）とパリッシュ（Parish）の三層制の地方団体について、(1)カウンシルの現況、(2)カウンシルのしくみ、(3)行政サービスの内容を分析し、とりまとめたものである。これは、日本の都道府県、市町村レベルの行政運営の実態に照準をあてたことになろう。

なお、本書の「地方政府」の名称は、下條教授の示唆によるものである。

以下、同書をまとめるにあたって、考えたこと、明らかとなったことのいくつかをご紹介してみたい。

日本とイギリスの地方自治制度を比較すると、次頁の表のような三つの特色がある。一つは中央・地方関係であり、

二つは、多様性であり、三つは、カウンシルの内容である。

(1) 中央・地方関係をみると、イギリスの地方団体は、Local governmentという。Localにおけるgovernment＝政府なのである。日本の場合、国と地方は連動しており、地方団体にgovernmentという考え方はない。

現代イギリスの地方団体は、中央政府による統制が強く、国会および法律による支配が前提とされる。日本の場合、包括的・官治的統制による支配が強いが、他方では、地方団体による裁量の範囲がより大きいといわれる。

(2) 地方団体のもつ多様性は、イギリスの場合、四つの地域毎に異なるしくみをもっていた。現在では、サッチャー政権による改革以来、イングランド以外の地域では、ディストリクト（市）だけの一層制である。イングランドでは、大都市圏におけるディストリクトだけの一層制であるのに対して、非大都市圏では、カウンティ（県）とディストリクト（市）の二層制である。地方団体は地域毎に、一層制と二層制による多様性をもっているのである。日本の場合、都道府県と市町村の二層制という画一的な制度である。

(3) イギリスのカウンシル（Council）は、議決機関であると同時に執行機関であり、その概念の中には、議決機能と執行機能が一体化して含まれている。議員（Councilor）をメンバーとするカウンシルは、その統括の下にスタッフ組織（Administrative Staff）をもち、双方は一体化している。これは、カウンシルの伝統的な理念型である。日本の場合、議決機関である議会と執行機関である首長組織（市長部局組織）とは、二元的に独立した機関である。

なお、イギリスのカウンシルの実態は、日本と同様に、議会と執行機関とが分離独立し、執行機関がより強力になるリーダーシップをとりつつある。

日本の市長は、住民による直接選挙制であるが、イギリスのチーフ・イグゼキュティブは、カウンシルによる任命制である。イギリスの市長（Mayor）は、カウンシルの議長が兼務しており、歴史上の名誉職としての名称である。

イギリスと日本の地方団体は、以上のような異なった制度をもっている。

現代イギリスの地方制度は、抜本的な行政改革（Local Government Review）が行われている。

サッチャー政権は、その強引な立法化によって、ロンドンおよび六大都市圏のカウンティを廃止し、一層制の地方制度を実施した。ロンドンでは、一九八六年にGreater London Councilが廃止され、三二のバラ・カウンシルとザ・シティの三三団体による一層制が誕生した。これは日本でいうと、東京都を廃止し、その事務のほとんどを二三特別区に移譲した一層制としたものである。六大都市圏では、六のカウンティが廃止され、三六ディストリクトによる一層制が実施された。

サッチャーの行政改革のねらいは、労働党の支持基盤で

イギリスと日本との地方制度比較

項　目	イ　ギ　リ　ス	日　　本
中央・地方関係	・国会・法律による支配 ・Central GovernmentとLocal Governmentの分離	・包括的・官治的統制による支配 ・国と地方との連動－地方団体にGovernmentという理念はない
多様性	・一層制、二層制の多様な制度	・二層制のみの画一的な制度
カウンシル	・カウンシルとオフィサー（職員）との一元的組織 ・議員の素人性（無給） ・チーフ・イグゼキュティブの任命制	・議会と執行部門との二元的組織 ・議員の専門性（有給） ・市長の直接選挙制

（出所）　大塚『イギリスの地方政府』１頁。

カウンシル数の推移

年	イングランド					スコットランド	ウェールズ	北アイルランド	合計
	非大都市圏			大都市圏					
	Counties	Districts	New unitaries	ロンドン	Metro-politan boroughs				
1994	39	296	0	33	36	65	45	26	540
1995	38	294	1	33	36	65	45	26	538
1996	35	274	14	33	36	32	22	26	472
1997	35	260	27	33	36	32	22	26	471
1998	34	238	46	33	36	32	22	26	467
1994～8	－5	－58	＋46	－	－	－33	－23	－	－73

㈱　この表では、シシリー島のカウンシルを除く。
（出所）*Local Government Policy Making*, Vol.23, p.4, 1997.3.

あったカウンティを廃止し、保守政権を維持するという政治的動機であったといわれる。

一九九〇年一一月に誕生したメジャー政権は、サッチャーによる一層制システムの推進を継承した。九八年四月までに、カウンシルは、上の表のように変革された。

スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの地域は、九六年以来、すべてを一層制の地方制度に移行した。残るは、イングランドの非大都市圏だけであり、九四年以来、五つのカウンティと五八のディストリクトが廃止された。他方では、これらのカウンティに、四六の新しいユニタリー（統一団体）が新設された。

こうした行政改革は、地方政府委員会（Local Government Commission for England）の設置によって進められた。その方法は、委員会とカウンティとのレポートの交換によって進められたもので、きわめて民主的なプロセスであったといえる。他方では、改革の方針が変わったり、決定が遅れたり、文書合戦が行われたりという状況で、カオスであったとい

う意見もある。

行政改革の困難性であろうか。いずれにしろ、現代のイギリス地方制度は、一層制による地方制度へと移行しつつある過渡期の状況にあると考えられる。九七年五月に誕生したブレア労働党政権の方針によっては、新たな方向へと推移する可能性をはらんでいる。

(1) カウンシル（Council）

イギリスの地方団体は、カウンシルという。日本では、Council を議会と翻訳しているが、しかし、イギリスのカウンシルと日本の議会とでは、次のように異なっているのである。

イギリスのカウンシルは、住民から直接選出された議員（Councilor）を中核とする組織である。議員はFull Councilを構成するが、それを支えるのは、行政スタッフ（Administrative Staff）である。行政スタッフ（職員）の長には、Chief ExecutiveがFull Councilから任命される。カウンシルは、議員組織（議決機関）と行政スタッフ（執行機関）との双方を統合した総合的機関である。

日本の場合、議会は、住民から選出された議員が構成する議決機関である。市長（又は知事）を長とする行政スタッフ組織は、行政サービスを提供する執行機関である。双方の機関は、二元的に独立した機関であり、チェック・アンド・バランスの関係にある。

要するに、イギリスのカウンシルと日本の議会とは、理念や範囲が異なるのであり、別の機関である。かくして、カウンシル＝議会は、厳密には正しい翻訳とはいえないこととなる。

(2) 議長・市長

イギリスの議会は、議員（Councillor）が自由に議論し、政策を審議決定する場所である。その議長はChairmanであり、Mayor（市長）を兼務する（別人の場合もある）。したがって、市長はFull Councilの長をさす。このことから、二つのことがいえる。

一つは、Chairmanは女性の議長が誕生して以来、Chairpersonまたは Chairといわれている。男性の場合、従来のChairmanを使うこともある。英語も時代とともに推移しているのである。

二つは、Mayor＝市長である。イギリスの議長はメイヤーを兼務している場合が多く、したがって、議長と考えてよい。日本での市長は、住民から直接選挙された執行機関の長であり、大統領制をとっている。イギリスで、日本の市長に相当する職務をもつ人物は、Chief Executiveである。しかし、チーフ・イグゼキュティブは、カウンシルから任命されるので、むしろ、アメリカ型のシティ・マネージャーに近いと考えられる。

イギリスのメイヤーと日本の市長とは、このように異なっているのである。したがって、Mayorを市長と訳すのは、

厳密には、正しいものではない。そもそもイギリスのメイヤーは、次にみるような歴史上の名称である。

(3) バラ（特別自治市）

イギリスのバラ（Borough）は、国王からチャーター（憲章）の授与によって与えられた特権をもつ特別自治市である。その歴史は、一一～一二世紀に発生したものであり、たとえば、コルチェスターでは、一一八九年にリチャード一世からチャーターが与えられている。

その特権は、都市が王軍の被護の下に外敵から保護される権利であり、市民はその代償として、毎年四〇ポンドの年貢を支払うものである。その内容は、次の項目である。

① 二人の執行吏員の選出
② 法廷の開催
③ コールン川と漁業権の管理
④ 王の森林法の免除（王の森でキツネ、野ウサギ、イタチなどの狩りをする権利）
⑤ 市場の保護
⑥ タウン市民の法廷からの除外
⑦ 商人の港での税金の免除

一六三五年のチャーターでは、二人の吏員の代わりに市長（Mayor）を任命することが認められ、以後、今日まで継続している。したがって、市長職は、バラ以外のディストリクトには、現在でも不在である。市長（メイヤー）の名称は、こうした歴史上に由来して生まれたものであり、「First Citizen」といわれる名誉職でもある。

(4) 教会（Church）

中世のイギリスでは、教会（Church）が街の中心に位置していた。教会は、現代の市役所、税務署、福祉事務所、警察署、教会などのすべての行政機能をもつ集権的な施設であった。教会は、税金、出生簿、埋葬簿、寄付金、献金などのすべての重要物を集約して所有していたのである。この教会を支えていたのが、パリッシュ（Parish）＝教区であり、地域を代表する教区委員であった。

近代に至って、教会から市役所、税務署、警察署などの機能が分離独立し、教会は、本来の宗教活動を中心とする施設へと推移してきたものである。

(5) 市役所（Town Hall）

近代の都市では、教会に代わって市役所が街の中心的施設である。タウン・ホールは、Councilのある場所であり、市民の代表者であるCouncillorが集まる場所である。議会制民主主義の国、イギリスでは、タウン・ホールは、市民にとって神聖な街のシンボルである。

イギリスと日本の地方制度には、以上のような相異点が見出せる。その典型は、Local Government＝地方政府を地方自治とする日本での把え方にある。

（流通経済大学教授）

■読書の周辺

日本社会の中心と周縁

長谷川　公一

出版地を略すのは

論文などで文献を挙げる際、外国語の文献の場合には、ケンブリッジとか、フランクフルトとか出版地を記すことが多い。書誌データとしてはむろんそれが望ましい。しかし日本語の文献の場合には、出版地は略すのが慣例になっている。いうまでもなく、ほとんどの場合、出版地は東京だからである。わざわざ文献ごとに東京、東京と記してあると、ペダンチックすぎて鼻につく。

出版文化に限らない。日本の文化や社会は、外国と比較してみると異常なまでに東京中心主義的である。このことは、今さら指摘するまでもないことのようだが、私たちがふだん「常識」として疑わずにいることで、冷静に論理的に考え直してみると「異様な」、外国には例をみないか、きわめて稀な首都中心主義の事例は多い。

上りと下り

列車には「上り列車」と「下り列車」がある、これは日本人の常識だが、世界の常識ではない。日本流に東京駅を起点に「下り」、東京駅を終点に「上り」というような露骨な中央集権思想を標榜している社会はほかにあるだろうか。外国の友人や留学生などにたずねたが、いまだに見つかっていない（読者がご存知ならご教示いただきたい）。上り列車と下り列車は日本社会の価値の中心がどこにあるかを端的に示している。

up は北へ、down は南へを示すという英語の用法がある（例えば、サンフランシスコから南のロサンゼルスに行くときは、go down になる）。仙台発東京行が下り列車で、仙台発札幌行が上り列車ならスジはとおる。外国人の日本語学習者にとって、あるいは日本に来た外国人にとってもっともわかりにくい概念の一つが列車の「上り」「下り」である。本気で地方分権をいうならば、まず「上り」「下り」という東京駅中心主義を廃止すべきである。

郵便番号の秘密

もう一つのわかりやすい事例は郵便番号である。あるとき名古屋に住む友人から、仙台の郵便番号が沖縄県のと近い数字だが間違っていないかという確認の問い合わせがあった。確かに宮城県は980番台、沖縄県は900番台である。東北地方と沖縄県が、なぜ似たような郵便番号なのだろうか。両者に共通する社会的属性は何だろうか。

郵便番号が900番台から990番台の県は、沖縄県と宮城・山形・福島・新潟・富山・石川・福井県である。なぜか原発の立地県が多い。稼働中の日本の原発五一基（もんじゅ・ふげんをのぞく）のうち三一基は、これらの県に立地している。宮城二基、福島一〇基、新潟七基、石川一基、福井一一基である。軍事施設と原発という現代社会の二大危険施設がこれらの郵便番号の県に集中しているのは単なる偶然ではあるまい。その答えは、これらの県の日本社会における周縁性にあろう。

宮城県よりさらに北の青森・岩手・秋田の各県と北海道は000番台である。原点としての0というよりも、1000番台という意味だろう（授業のときに、こうコメントすると学生がどっと笑った）。さらに周縁的な地域ということだろうか。ちなみに九州は800番台である。

原点の100番はもちろん東京都千代田区である。皇居の位置する千代田区千代田が100-0001、皇居外苑が100-0002、大手町が100-0004、丸の内が100-0005、霞ヶ関が100-0013、永田町が100-0014……。郵便番号は、日本社会の価値の中心がどこにあるのか、どこが周縁的な地域なのかを示す指標である。

たまたま手元にアメリカの郵便番号簿がある。郵便番号は五桁。ボストンなどのあるマサチューセッツ州ほか北東部の諸州が00000番台で、原則的には南西部にいくにしたがって番号が増え、カリフォルニア・オレゴン・ワシントン州の西海岸三州とアラスカ・ハワイが99000番台である。かならずしも原則ははっきりしないが、日本のように価値の中心ほど若い番号というわけでは決してない。

一区はどこ

もう一つの例は選挙区である。旧制度でも、新制度でも、衆議院の一区は県庁所在地を含む選挙区という決まりになっている。各県で北から順に一区というわけではない。旧一区が複数に分かれる場合、県庁所在地を含む方が新一区で、旧一区内の隣接する区が新二区、離れるにしたがって三区・四区となった。旧一区が四区までで終わったら、旧二区は五区・六区……となる。つまり単純化していえば、県庁所在地から遠くなるにしたがって、選挙区の番号は増えるのである。

例えば北海道の網走市内の主要部は郵便番号093番台、市内周縁部は099番台、衆院選の選挙区は北海道一二区で

ある。こうして網走市民は、日常的に自分たちの地域の周縁性を刷り込まれていくのである。

マスメディアもこのようなコメントはしないし、日本中のほとんどの市民はおかしいとも思わずに、このような完璧なまでに貫徹した中央志向的なシステムにおとなしく従っているのである。

中心と周縁

価値の相対的な中心性と相対的な周縁性に、日本社会はきわめて敏感である。中心に近いほどエラく、周縁に位置するほど価値が低い。しかもその尺度は、中心との社会的な距離という一元的なものさしである。叙勲制度や天下りシステムにもっとも露骨な官尊民卑、「中央」という言葉の使われ方などなど例は枚挙にいとまがない。

新幹線で栃木県の小山をとおるたびに苦笑することがある。地方銀行員の子どもだった私は、少年時代を、郵便番号999-6100番台の、山形県境の奥羽山脈の山懐の小さな町で過ごした。その町の子どもたちの三十数年前の常識は、県庁所在地の山形市も、たまたま隣家の親戚のいる小山も、宇都宮も「東京のような都会」だった。自分たちの手の届く範囲の「いなか」と、簡単には行けない「都会」とに世界は基本的に二分され、しかも子どもたちの心的世界では東京に近いほど都会性が強かった。

日本社会の一極集中的な構造の打開が叫ばれて久しいが、誰も、本気で取り組もうとはしていない。実は、日本社会の根本には、このような社会的な諸価値が中心点へと一元的に収斂していくとともに、そこから価値が放射状に拡散していくというメカニズムがある。地方が評価されるのは、中心部の有力者や外来の有力者（例えば柳田國男やラフカディオ・ハーン）が、地方を評価した場合である。

地方のメディアが、独自にはなかなか発展しにくい理由もここにある。CNNの本拠はアトランタであって、首都ワシントンでも経済活動の中心ニューヨークでもない。

しかもこのような中心と周縁のダイナミクスは、前近代以来、日本社会に根深く存在してきた思考様式や行動原理のようだ。「東下り」、「都に上る」、今にも残る「都落ち」という言葉がある。

『奥の細道』の美学

「心許なき日かず重るままに、白川の関にかかりて旅心定まりぬ。「いかで都へ」便求しも断也。」『奥の細道』の白河の関の下りである。よく知られているように、『奥の細道』は歌枕をたずね歩く旅であった。

たよりあらばいかで都へ告げやらむけふ白川の関は越えぬと　平兼盛（拾遺集）

都をば霞と共に出しかど秋風ぞ吹く白川の関　能因法師（類字名所和歌集）

奥州、みちのくは「道の奥」であり、「白河の関」は、いわば「異境」への入り口だった。だからこそ、芭蕉は旅への決意を新たにするのである。

例えば、日本各地の盆踊りや寺社仏閣、温泉なども、事実の歴史的当否は別として、そもそもの由来・縁起は、京や奈良の都にゆかりとする場合が多い。弘法大師や行基などの都からの高僧に由来を求めたり、京から来た姫君の無聊を慰めるためにはじまった盆踊りとするなどである。

各地に残る落人伝説も同様である。今はひなびた僻村に住むが、そもそもの先祖は平家の落人だったなどとする伝説である。実証できない場合が多いというが、柳田國男は、このような落人の末裔たちの心理を「均霑努力」と呼んでいる。現在の貧しい境遇を、京にあった当時の先祖の栄光と落人としての宿命によって心理的に補償しようとするメカニズムである。

根拠地を中心化する

このような例をとおして思うことは、本来、地域主義や地方主義の基盤であるはずの、地方そのものをそれ自体として価値化する思想や文化が、日本社会ではいかに乏しく、根が浅いか、である。

いなかをいなかたらしめているのは、「いなか」という、「周縁性」という意識そのものである。そして郵便番号や列車の上り下り、選挙区などに代表される各種の制度化された刷り込みの機構がある。

それぞれの拠点を、根拠地を中心地として価値化する思想と実践、地方の時代は、そこからしかはじまるまい。その意味でも、芭蕉的あるいは柳田國男的な外からのまなざしを脱し、内側からのまなざしで東北の文化の多元性と普遍性を再発見しようという赤坂憲雄氏の『東北学へ』全三巻（作品社）は貴重な仕事である。

大学出版部の使命

大学出版部協会に加盟する会員・準会員の出版部二四社のうち、東京都以外に所在するのは九社、三七・五％である。三分の一以上が地方に所在することの意義は大きい。大学出版部の活性化は、日本の出版文化、とくに学術書出版の東京中心主義を是正する意義ももっているのである。

二一世紀の半ばぐらいには、日本でも出版社の地方分散がすすみ、文献挙示の際に出版地の併記が必須となるような時代がはたして来るのだろうか。

筆者は誕生三年目の東北大学出版会の理事の一人である。専任スタッフは一人、あとは教員を中心とする素人集団である。制作から営業まで何もかも試行錯誤の歩みではあるが、新刊書が刊行されるたびに、奥付けに記された、

〒980-8577　仙台市片平二―一―一

の出版地の住所がまぶしい。

（東北大学教授）

岐路に立つ大学出版部

――一九九八年度アメリカ大学出版部協会（ＡＡＵＰ）総会に参加して

渡辺　勲

1　「学術出版」という看板の重さ

財団法人日本生命財団から大学出版部協会加盟出版部の学術書に対する「刊行助成」制度が発足して、今年で二十年になる。この間、この制度によって刊行を果たすことが出来た学術書は二〇四点、助成総額は五億〇四八四万円である。私はここで、日生助成制度の紹介や、それに係わる問題を分析しようとしている訳ではない。わが協会総体の、年間七三三点に及ぶ出版成果（一九九七年一～十二月）の中にあって、この制度による出版物こそは学術書の名に値する「質」を持っていると確信し、「学術出版」検討の手掛かりとして、その対象に取り上げたのである。

実は毎年九月、私たちには、日生財団に対する本助成制度刊行物の過去三期分の「売上報告」が義務付けられている。今年の該当出版物は二九点だったが（助成総額八九一三万円）、それを①頁数（Ａ５判に換算）、②本体価格、③印刷部数、④売却数（一年間に換算）、⑤助成金、ごとに集計し、平均化に馴染まない五点の出版物を除き、それぞれの平均値を出してみたのである。そして次のような結果を得た（集計や換算・平均化の手順については紙幅の関係で省略せざるを得ない）。――①Ａ５判・四三二頁、②八四二一円、③八二一部、④四三一部、⑤二四三万円。

この、大学出版部にとって典型的といってよい学術書の経済性は、如何なものだろうか。出来るだけ単純化して考えてみよう。まず直接原価（人件費も編集費も販売宣伝費も何も含まない）を四〇％として、この本の原価総額を算出すると、②×〇・四×③から二七六万五四五六円となる。刊行一年後の売上額（回収額）は正味七〇％で計算すると、②×〇・七×④だから、二五四万〇六一六円である。初年度売却率は④÷③＝五二・五％、売れ残った三九〇部はまず十年近くは在庫せざるを得ないだろう。この本は（出版すべきと判断されたこの学術書は）、間違いなく⑤によって辛うじてその経済性を保っている、この本にとって⑤の存在は決定的なのだ。これが、「学術出版」の極め付けの現実である、と言うことが出来るだろう。

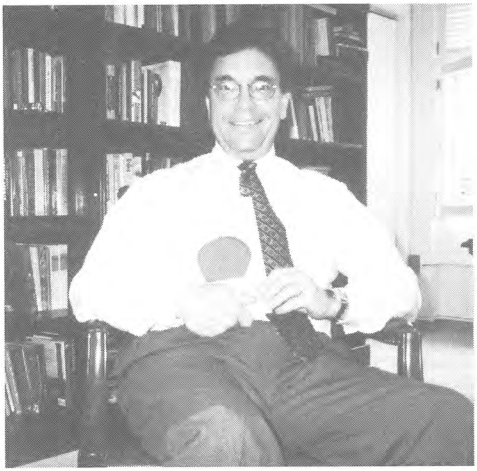
皮肉な見方もしてみよう。では、もし⑤の当てがなかったら、この学術書は日の目を見ないことになるのだろうか。いや「学術出版」の看板を掲げた大学出版部には、それが許されるのだろうか。金の手当てがつかないから（出版す

べきと判断した学術書であっても）出版が出来ないでは、商業出版と同じではないのか。さあどうする。大学出版部は「学術出版」の看板を下ろした方が楽になれるのではないか。

2　アメリカの大学出版部は変わりつつある

ここに、私たち大学出版人が、かつて「聖書」のごとくに読み込んだ、G・R・ホウズ『大学出版部』（箕輪成男訳、一九六九年）の有名な一節を引用してみよう。

「われわれは最大のコストをかけて最少部数の本を出版する。そしてわれわれは、それに最高の定価をつけ、最低の購買力しかない人々に売ろうとしている。全く正気の沙汰ではない。」（同書、四頁）



Harvard UP の Director, William P.Sisler氏に本会の最新の英文図書 *A History of Shōwa Japan, 1926-1989*（中村隆英著）を献呈。Harvard UP は職員82人、年間新刊数140点、年商1400万ドル、アメリカ屈指の大学出版部である。（6. 22. Press の彼の執務室にて）

これは、イエール大学出版局長チェスター・カーが、一九五〇年代の大学出版部について語った言葉である。彼の狙いは、大学出版部には母体大学の財政的支援と出版助成金が不可欠であることを強調することにあったが、のちにカーは一九六〇年代後半においても、このことは本質的には変わっていないと述べた上で、「総長その他大学の指導者たちからの支持によってはじめて、急増する（学術出版にたいする）需要に対応して（大学出版部は）膨張することができた」と、その「成長」の秘密を語ったのである。それから三十年という歳月が流れた。日本の大学出版部は、先の「日生型」を学術書の一つの典型であると考えてよいとすれば、いまだに、アメリカの「三十年前の現実」の中にとどまっている、と言うことが出来るのかも知れない。アメリカの大学出版部はと言えば、明らかに、このような「段階」を越えつつある（越えてしまった）、と私には思われる。それは、ハッキリしていることだけに限っても、二つの道筋を通してである。もちろんここで断っておかねばならないのは、一口にアメリカの大学出版部と言っても、協会加盟出版部は一〇〇を越えており、規模、出版内容、母体大学との関係のあり方等、極めて多様であり一般化することは、実は不可能（日本の現実も同様だが）、ということである。にもかかわらず私が「アメリカの大学出版部は」という言い方をするのは、そのことが、最近のアメリ

お二人の著名なジャパノロジストとの会食は、日本語が共通言語だったこともあって、楽しく刺激的だった。「日本」の現状を、これほど正面(まとも)に真剣に議論したのは久しぶりのこと。写真は右から、Albert Craig博士(Harvard Univ. 前ライシャワー研究所長)、倉田さん、Andrew Gordon博士(現ライシャワー研究所長)、そして私。
(6. 22. Harvard Yardの由緒あるレストラン"Upstairs at the Pudding"にて)

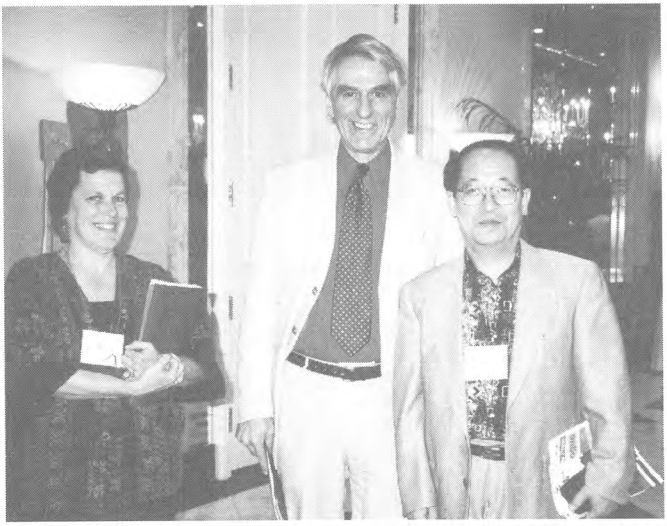
カ出版界における大学出版部を特徴付けることとして、しばしば引き合いに出されるからであり、私の今回の「AAUP総会参加と大学出版部事情視察の旅」においても、際立った印象として残っているからである。

さて、話をもとに戻そう。二つの道筋の一つは、大学出版部の母体大学からの「自立」と「売れる学術書・一般書」への転換である。多分この二つのことは、新しい事態の表裏をなしている、と思われる。母体大学の出版部にたいする「支援」では、その創設の歴史にもかかわらず(大学の研究成果である学術書のみを出版するために大学機構の中に位置付けられたにもかわらず)、出版部を十全には支えることが出来なくなった。したがって出版部は稼がざるを得なくなり、そして稼ぎ始めた。より稼げる出版部は、母体大学のしがらみから自由になって「自立」したいと思うようになった。そして、採算の合わない学術書は捨てられていった。大学出版部は「儲かる学術書」の側に立って、依然として学術書の担い手は自分たちだと主張している。しかし「捨てられた学術書」の側から事態を眺めるならば、大学出版部は「普通の出版社」へと変身してしまったのである。これが「クロス・オーバー・パブリッシング」cross over publishing 思想の実体であり、採算の合わない学術書を、さまざまな「支援」によって出版することが、唯一の存在理由だったアメリカの大学出版部において、起こっている事態である。

いま一つの道筋は、テクノロジーの飛躍的進歩が切り開いた、と言えよう。それが「オン・デマンド・パブリッシング」on demand publishing である。従来なら、出版部が大学の支援と補助金を得て可能にしていた博士論文級の「出版」(見込み生産)が、オン・デマンド・パブリッシング(注文生産)にとってかわられつつある、ことである。

私は、コロンビアUPで、この現実（二五部単位）を実際に見ることになったが、その時の驚きは筆舌に尽くしがたい。

このように、私がアメリカ「体験」から得たものといえば、詰まるところは、「大学出版部とはどのような存在なのか？」、「学術出版の未来はどうなっていくのか？」という、素朴といえば素朴、根源的といえば最も根源的な、疑問だったのである。



AAUP本部DirectorのP.Givler氏と総会の議論を逐一通訳して貰った本会元職員シュミットさんとの記念撮影。
(6.28.総会会場となったワシントンDCの一流ホテルRenaissance Mayflowerのロビーにて)

3　「変化の時代」の大学出版部

視点を変えて考えてみる。大学は、私たちの母体大学は、自分の大学の名前を冠した出版部のことを（抽象的にも実態的にも）どのような存在として考えているのだろうか、何を期待しているのだろうか。創設間もない大学出版部にあっては、しばしば、特に理念的には明確であったはずの「こと」だが、出版の論理の中で自己運動を始めてそれなりの期間が経過してしまった多くの大学出版部にとって、この「こと」は、必ずしも自明のことではないのではないか。この「こと」を改めて明確にすることが、大学名を冠した出版組織にとって必要なことではないのか。私たちは、母体大学に向かって、「あなた方は私たちのことをどのように考えているのですか、何を期待しているのですか？」と問わねばならない。そして、その返答次第では「私たちにも考えがある！」と開き直れる程度の「自覚」が求められているのではないか。

こんな乱暴な話を始めたのには理由がある。それは「大学の変化」である、しかも始まったばかりの、これから本格化する「変化」に係わってのことであり、その「変化」と大学出版部との関係である。私たち大学出版部は、どんなに足掻(あが)いても、母体大学を前提とした（大学名を冠した）出版組織、という現実から自由にはなれない。とすると、

大学が私たちに何を求め、私たちが大学に何を求めるかは、「変化の時代」にあってはとりわけて、重要な意味を持つのではないだろうか。アメリカの大学出版部は、いまこの課題を正面に見据え、そして越えつつある。

越えるに当たってアメリカの大学出版部は、次のような問題を真剣に議論し始めている。AAUP総会プログラムの一文を引用する。

「私たちは巨大な技術革新の波の中にあって、書籍販売の面で、また図書館や学生の図書購入方法の点で、多くの変化に曝されており、さらに新しい労働の仕組みの必要性と共に、母体大学との関係のあり方にも、変化が生じている。……このような問題意識のもとに私たちは、最新の諸課題――〈エルゴノミックス〉や新人スタッフの教育や、この不安な時代にあっていかにしてお互いにやる気を起こすか、など――を取り上げ、議論することになろう。」

＊〈エルゴノミックス〉ergonomics は、辞書によると「人間の能力に作業環境・機械などを適合させる研究」とのことである。

アメリカ大学出版部協会の現状は、明らかに日本のそれの数歩は先を歩んでいる。そして彼らが抱え込んでいる問題は多分すべて、私たちにとっての「近未来」である、と思う。彼らの素晴らしい先見性は、問題解決に当たって、「〈エルゴノミックス〉や新人スタッフの教育や、この不安な時代にあっていかにしてお互いにやる気を起こすか」という主体形成の問題と重ね合わせていることだろう。この観点から事態を見るためには、従来型の思考枠組・価値観から離れなければならない。しかし私たちに、それが、出来るだろうか。私たちを乗り越えた「新しい大学出版人」の登場によって、私たちの眼前にある困難な状況は切り開かれて行くはずだが、問題は、それまで、事態の方が「待っていてくれるか」である。そう考えると日本の大学出版部は、いま、重大な岐路に立っていると言えるのではなかろうか。

4　小さなまとめ

アメリカの大学出版部の現実に多少ながら触れてみて思うことだが、学ぶべきことや触発されたことは、確かに多かったが、「見習うべきこと」は意外にもなかった、と言うことである。アマゾン・コムに代表されるオンライン・ブック・セールの急成長ぶりやオン・デマンド・パブリッシュの進展など、テクノロジーの発展によって大変化を遂げつつある「アメリカの現実」は、もちろん大変な刺激ではあったが、それらはある意味では私たちにも既に理解可能な状況であり、部分的には私たちの「現実」でもあるからである。「大学出版部の使命とは何か？」の答を求めて呻吟する「旅」に、終わりは来ないのだろうか。

（東京大学出版会常務理事）

〈第十七回編集者の集い〉

大学出版部の本の装幀について

小池　美樹彦

大学出版部協会編集部会では、毎年、「各大学の編集者相互の親睦を図りながら知見を広める」ことを目的として、「編集者の集い」を催している。今年度は標記のテーマの下に、左記の要項で研究会を行った。

日時――十一月十二日（木）十六時～十九時
場所――東京電機大学十一号館大学院会議室
報告者――秋田公士氏（法政大学出版局）
　　峯田敏幸氏（聖学院大学出版会）
　　稲　英史氏（東海大学出版会）

まず、編集業務の一環として装丁も手掛けられている秋田氏は、「編集者による装幀の功罪」と題して、①なぜ装幀を手掛けるのか、②編集者による装幀のレベル、メリットとデメリット、③装幀の実例・私の場合、④デジタル化による変化、について報告した。とくに、編集者として装幀を手掛ける理由は、一冊の本が出来上がるまで、その全ての行程（工程）に立ち会いたい、でき得れば深く関わりたい、というのが、編集者の正直な気持ちではないか、と説き、せめてどこかでもう少し深く「本づくり」に関わりたい、そういう気持ちを多少とも満たしてくれるのが、氏の場合には「装幀」という作業なのである、と話した。

秋田公士氏

さらに、氏は、装幀に限らず組版や印刷やレイアウトについても、本造り全体への関心と、何らかのこだわりを捨てないで欲しいと、若手編集者に呼び掛けた。また、編集者による装幀のレベル、メリットとデメリットについては、専門家による装幀のほうがレベルが高いのは当然としつつも、編集者によるものか、プロに依頼したものかではなく、装幀はそれ自体として評価されるべきものと主張した。

また、編集者による装幀のメリットについて、本の内容を理解していること、自社出版物のトータルなイメージがあるために突拍子もないデザインにはならないこと、さらに予算もわかっているので、用紙や製版の費用、印刷の色数などにも配慮した装幀が最初からできること、をあげ、デメリットはこれらのメリットの裏返しであるとした。すなわち、内容を知っているので、それに引きずられる、自社

出版物に対する強いイメージのために型を破ることができない、常に予算が頭にあって最善の選択をする前に自ら妥協してしまう、そして、これらはすべて創造的な仕事にとっては致命的である、と強調した。続けて氏は、「編集者は余計なことに手を出さず、本来の仕事に集中すべきだ」という意見があるが、装幀も編集の本来の仕事の一部であり、編集者による装幀に「本来の仕事がおろそかになるというデメリットがあるとは思わない」と力強く語った。

最後に、自身で手掛けられた装幀の実例をホームページから引き出して紹介しながら、色調、書体、文字のデザインなどについて、苦心した点などを披露した。

続いて、峯田氏は、「装幀の実際——Adobe Illustratorを使って」と題して、①基本コンセプト（何に気をつけているか）、②実例、③コンピュータによるデザインで何が変わったか、その問題点、④今後の課題、などについて、マッキントッシュのデザインソフトを使っての仕事の実際を、コンピュータの画面上で具体的に半ば実演する形で話を進めた。なかでも、同じ色がモニターとカラープリンターと印刷仕上りでは異なる、という実例は印象的であった。問題点と言うよりも、装幀デザインにとっては致命的なことであろう。

峯田敏幸氏

峯田氏は、コンピュータのハード・ソフト面での進歩にふりまわされることなく、いかにそれらを活用してゆくかが今後の課題である、と結んだ。

稲 英史氏

最後に、稲氏は、「学術書の装丁について」と題して、①東海大学出版会の装幀の話、②制作担当者として、③ブックデザインを依頼する、④私の本づくりから、⑤寺山浩司氏（早稲田大学出版部）からの質問に答えて、等について、具体的かつ豊富な資料に即して報告した。とくに、装幀については企画段階からの編集者のプランニングが大事である、とし、具体的な数字を示しながら、進行とコスト管理の面から、装幀・造本の実際について話した。

いずれの報告も一時間に及ぶ充実した内容であって、予定した討論の時間が十分とれなかったことが惜しまれたが、唯一人営業担当者として参加された小山美和さん（東京大学出版会）の「流通段階での本の扱われ方や書店での陳列のされ方を意識した装幀を心掛けてほしい」という要望が出されて閉会となった。

（東京大学出版会）

歩く・見る・聞く
知のネットワーク 13

都会の中のオアシス空間

髙木盆栽美術館を訪ねて

わが国で初めての盆栽美術館が市ヶ谷にあると聞いて、訪ねてみた。JR市ヶ谷駅から徒歩一分、オフィス街の一角に、一対の巨大な狛犬にその入口を守られるようにして屹立するビル内に美術館はあった。

盆栽は中国で生まれ、わが国へは遣隋使・遣唐使によってもたらされたと考えられる。事実、続日本紀の記録に始まり、蜻蛉日記、西行物語絵巻、一遍上人絵伝等にも記載があり、鎌倉・室町・江戸時代を通じてかなり盛んであったようだ。そして現代のように自然美を尊重する盆栽が主流となり、海外の評価が高まってBONSAIなる国際語が定着したのは比較的最近のことだといわれる。

――一階で受付を済ませ、エレベーターでまず九階に上がる。――　屋上庭園である。土塀に囲まれ湧水を湛える庭園に配置された五葉松の盆栽が眼にとび込む。琴の調べをバックに流れる解説によると、樹齢五百年、蔵王山海抜千五百メートル、人跡未踏の岩壁に芽生え、風雪に耐えて生き抜いて四百年の松を、百年前盆栽に設えたという。銘は「千代の松」といい、鉢は「誠山楕円」。大阪で開催された「花と緑の博覧会」に出品され高い評価を得た。現在は常設展示品となっている。ビルに入れるときは、その大きさのゆえ、エレベーターでは搬入できずにクレーンで運び上げられたという。古木とは思えない溢れる生命力を感じさせる模様木の逸品である。

――九階から八階へは徒歩で降りる。――　階段の壁には、盆栽の盛行を物語る浮世絵（安藤広重画「盆栽売り」等）十数点が掛けられていた。平安・鎌倉時代には高い身分の人々が愛好していた盆栽が、江戸時代には庶民の生活にも浸透していたことが偲ばれ興味深い。八階はメインの展示場である。ほどよく落とした照明の中、盆栽本来の飾り方である〝床飾り〟を中心に、初雪かずら、風知草など季節感溢れる作品がゆったりと展示されていた。また、「古渡桃花泥」外縁隅入銅器文雷文下帯雲足長方など、日本・中国の盆器の名品が数多く見られた。ひと渡り見学した後、〈培養場〉の表示が目に入ったので八階の屋外に出てみた。

真柏　銘「寿雲」
樹齢約800年
国風賞受賞

五葉松「千代の松」　樹齢500年

大形の松柏を中心に数十の盆栽が並べられ、係の人の世話を受けているところであった。

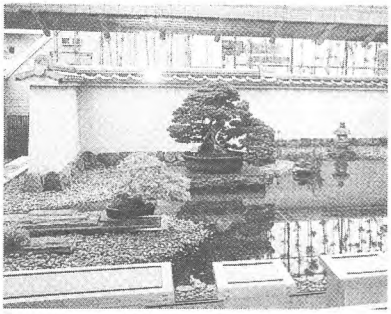
陽光が射さず空調の利いた屋内は植物にとって非常に苛酷な環境であり、三日から長くても一週間が展示期間の限界である。さらに、この培養場などでその疲れを癒しても、元の状態に戻るのには三か月間を要するという。美術館を運営する財団法人・高木伝統園芸文化振興財団では、その所蔵する名品四百余のうちから、季節にふさわしくて状態の良いものを選んで順次展示しているが、主要なものは大宮市の盆栽町で養生をしている。

この財団は地球環境における緑の保存問題、伝統園芸文化を通じた国際文化交流、生涯学習活動の場としての美術館、といった視点から事業を行っており、共感を覚える点も多いので、財団の理事長で美術館館長でもある高木禮二氏の言葉をご紹介する。

「盆栽こそは自然環境を自分の手で再現し、盆上に理想の自然景観を求め、その中に精神性をも見ようとする高尚な趣味です。日本伝統の素晴らしい芸術である盆栽、この盆栽趣味を長く子々孫々まで伝えていくためにも、日本の自然環境、ひいては地球環境を守らなければなりません。」（下略。「随筆・趣味歴程」近代盆栽掲載）

――八階から二階の喫茶室に降りる。――　ここでは盆栽関係図書の閲覧や所蔵盆栽映像資料の視聴ができる。無料サービスの茶菓を頂戴しながら、ビデオＢＯＮＳＡＩにしばらく眺め入る。入館料・大人八百円で都会のオアシスを堪能した（毎日この雰囲気を楽しみたい人のため六か月パスポート三千円等もある）。

（放送大学教育振興会・成川慶一郎）

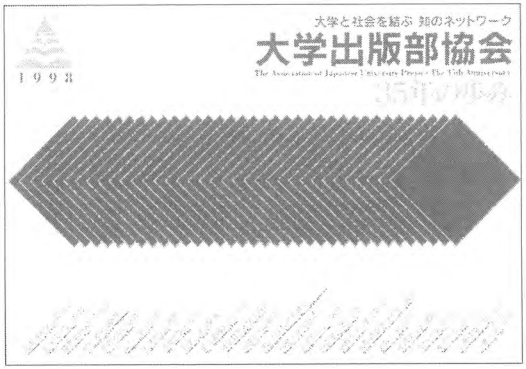


盆栽庭園と「千代の松」

高木盆栽美術館

〒102-8372　東京都千代田区五番町１－１
☎03－3221－0006
開館時間　午前10時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（休日の場合翌日）
交　　通　ＪＲ市ヶ谷駅
　　地下鉄都営・営団市ヶ谷駅
　　（出口３）

大学出版部ニュース



『大学出版部協会35年の歩み』

▼35周年記念事業の経過と報告

大学出版部協会は、一九九八年六月一一日をもって創立三五周年を迎えました。これを記念して、協会では以下のような事業を企画・実行しました。

《35周年記念ブックフェア開催》

「創立35周年大学出版部協会ブックフェア」が、一九九八年五月の名古屋大学生協、同志社大学生協などを皮切りに、協会加盟校および全国有力大学キャンパスにて開催されています。会場には、多種多様な本とともに、各大学出版部の図書目録、本誌「大学出版」の最新号などが並べられ、好評を博しています。

このブックフェアは、引き続き三月まで開催される予定です。

《『35年の歩み』刊行》

大学出版部協会の歴史と現状が一望できる『大学出版部協会35年の歩み』が刊行されました。

この冊子は『30年の歩み』に続く最近五年間の軌跡を増補したもの。八大学出版部と二学術団体でスタートし、現在は二四大学出版部となった大学出版部協会の発展プロセスが記されています。

三五周年という区切りを機に、創立の志やいままで辿ってきた長い道のりを再確認し、いまを見つめ直す作業は、十分に意義のあることでした。ご関心の向きは、大学出版部協会事務局（東京大学出版会内）までお問い合わせください。

▼第17回「編集者の集い」

第17回編集者の集いが、一一月一二日（木）東京電機大学一一号館にて開催されました。

今回のテーマは「大学出版部の本の装幀について考える」。編集業務の一環として装丁も手がけている秋田公士氏（法政大学出版局）、デザインが専門の峯田敏幸氏（聖学院大学出版会）、製作の面から装丁に携わっている稲英史氏（東海大学出版会）の三氏による発表がありました。

どの大学出版部でも、学術専門書の装丁の在り方についてはいつも頭を悩ませていることと思います。今回の集いは今後の本づくりに大いに参考になったのではないでしょうか（詳細は一五頁参照）。

■訃　報

阿部好文氏（法政大学出版局常務理事、当協会副幹事長）一九九八年一一月一八日午前九時一六分心筋梗塞のため死去。六五歳。

北海道大学図書刊行会

▼山本正編『近世蝦夷地農作物地名別集成』（A5判・三二〇〇円）その全容が不明であった明治以前の蝦夷地の農業について、膨大な文献資料の中から地域別に農作物栽培の歴史をまとめ、現在の市町村別に全貌を明らかにした初の成書。▼ヘーガン著／西村・野田・島川訳『アメリカ・インディアン史［第三版］』（B6判・二六〇〇円）『シカゴ大学アメリカ文明史叢書』の一冊。最近の動向を分析した第七章を増補。▼久保田義弘著『ストック経済のマクロ分析―価格・期待・ストック』（A5判・六〇〇〇円）ストックや期待が実体経済に果たす役割から出発し、古典的モデル・二部門モデル・三金融資産モデルに焦点をあて、ストック化したマクロ経済の新たな解明を目指す意欲作。▼カーペンター著／北村二朗・川上倫子訳『壊血病とビタミンCの歴史―「権威主義」と「思いこみ」の科学史』（四六判・二八〇〇円）大航海時代から今日までの壊血病とビタミンCを巡る著名人の驚くべき物語。一九三二年に発見され大量生産されるようになったビタミンCだが、物語はさらに続く。

聖学院大学出版会

▼『「宇魂和才」の説――二十一世紀の教育理念』（大木英夫著、二四〇〇円、四六判・三〇四頁）

大学教育の危機が叫ばれて久しい。組織神学者であり、学校法人の理事長でもある著者は、大学の歴史を論じ、現代の教育問題の根底にあるピエタス（敬虔・超越次元）という理念の欠如を指摘する。とくに日本では、近代化の指導理念であった「和魂洋才」が、大学制度においても取り入れられ、知識・技術を増大させるがそれを支える理念を無視し、軽視した教育がなされてきた。そこに現代日本の文化的混迷、教育問題の根がある。

著者は、グローバリゼーションの時代に「和魂洋才」では、このような現代日本の混迷に、また教育問題に対応できないと論じ、二十一世紀への新しい文化理念、教育理念を求めることを主張し、「和魂洋才」に代わる「宇」（宙）魂和才を文化形成、教育の理念とすべきことを提言する。

現代日本の精神文化の問題と教育の課題に新しい視点を示す、日本文化論・教育論である。

慶應義塾大学出版会

▼『イギリス中世・チューダー朝演劇事典』（松田隆美編著、六〇〇〇円）はシェイクスピア以前二五〇年間のイギリス演劇の全容を明かす海外にも類をみない画期的な事典である。『日本における西洋医学の先駆者たち』（J・バワース著、金久卓也他訳、三八〇〇円）は西洋人医師たちと日本人医師たちの交流を描いた近世・近代医学史である。『法体系の概念―法体系論序説第2版』（J・ラズ著、松尾弘訳、四八〇〇円）はハート、ケルゼンらの理論を批判的に検討し新たな法分析の視点を提示した現代法学の名著である。『地方自治の実証分析　日米韓3カ国の比較研究』（小林良彰編著、三五〇〇円）は日米韓の同時調査に基づき、わが国の地方自治のあり方を、中央―地方関係の再編を視野に考察する。

▼『近代国家の再検討』『政治・社会理論のフロンティア』『日本政治の構造と展開』『地域研究と現代の国家』『冷戦後の国際政治』『政治学科百年小史』（二〇〇〇～二八〇〇円）は慶應義塾大学法学部政治学科開設百年を記念して、政治学科の教員を中心に執筆されたものである。

産能大学出版部

▼『マーケティングのための多変量解析』（清水功次著、二〇〇〇円）

パソコン、インターネットの発達により、ますます情報は複雑化、多様化しており、企業にとって、顧客のニーズ、市場動向を的確に把握することは非常に困難な時代となった。そのため今、注目されているのが、データベース・マーケティングであり、その中でも特に注目されているのが、多変量解析、データマイニングである。本書では、一般的に理解するのが難しいといわれている多変量解析を、高度な理論は一切使わず、極めて活用頻度が高く実践的な手法のみを、データマイニングと絡め、初めて勉強する人にも容易に理解できるよう、例題をまじえ、わかりやすく解説する。

専修大学出版局

▼大河内俊雄著『アメリカの黒人底辺層』（二二〇〇円）アメリカの社会問題の根底にあるのは黒人問題である。一九六四年の公民権法の制定にも拘わらず、黒人の社会経済的な不平等は一向に解消されなかった。逆に、黒人のコミュニティは一部の中産階級と広範な貧困層とに両極化した。本書は、これまでの歴史的背景や人種統合の理念を検討し、住居・婚姻・犯罪などのデータから黒人問題の現状に迫る。特に貧困層のさらに下の底辺層についてその荒廃化の実態を明らかにする。

▼専修大学今村法律研究室編『帝人事件別巻一』（四一七五円）昭和九年初某誌が発した不当株問題に検察が着手、財界人や大蔵次官らを贈収賄容疑で召喚拘束、世上騒然とさせた。法相は事件の有罪見通しを公言、蔵相の子息にまで株利益が渡ったとの噂に内閣は総辞職、政党政治の弱体化と軍部肥大のシナリオが見え隠れする。弁護士今村力三郎が「法は元、死物、之を活用するは人に在り。人生の不幸冤罪より甚しきは莫矣」の信条に則り、公判廷で展開した事件弁論を集めたのが本巻である。その舌尖極めて明瞭である。

玉川大学出版部

▼苅谷剛彦著『変わるニッポンの大学―改革か迷走か―』（二五〇〇円）

日本の大学はどこへ向かおうとしているのか。なぜいま改革が一斉に進んでいるのか。拡張と教育改革のさなかにある「やさしい時代」の大学で、教育の質の維持はどこに求めればいいのかを問う。

▼中西通著『能のおもて』（七五〇〇円）

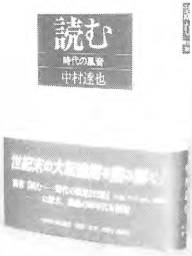
能楽資料館所蔵の代表的な面に加え、近年発見収蔵した優品を数多く掲載した写真集。面裏の鑿痕・焼印、さらに漆書の記録などを克明に収録・解説する。カラー原寸七三点、他四〇点、白黒九六点。

中央大学出版部

▼中村達也著『読む―時代の風音―』（本体一八〇〇円）

本書は、著者が『読売新聞』、『日本経済新聞』、『東京新聞』、『月刊Asahi』、『経済セミナー』掲載の書評を中心に『エコノミスト』、『日本経済新聞』の論壇時評と『毎日新聞』掲載のエッセイ等を収録した書評集である。好評を博した『読む―時代の風景342冊』（TBSブリタニカ、一九九二年）の続編。

とりわけ『日本経済新聞』で論壇時評を担当した一九九五年は、戦後五〇年の節目の年だけではなく、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、急速な円高の進行といった出来事が社会を揺るがし、論壇が賑わいを見せた時期でもあった。そうした雰囲気が、書評、エッセイとともに少しでも伝わってくれれば幸いである。



東海大学出版会

▼メラニー・メルトン／中村浩美訳『ブラックホールは宇宙を滅ぼすか?―知りたかった天文・宇宙101の疑問』（A5判・一六二頁・本体一四〇〇円）

「太陽は燃えているの?」「火星には運河があるの?」「土星の環は何でできているの?」「白色矮星って何?」「流星と隕石はどう違うの?」「銀河はいくつくらいあるの?」「ブラックホールに吸い込まれたものはどこへ行くの?」。このような、宇宙に関する素朴な質問でさえ、高度な天文学・物理学の要素が含まれている。

本書は、十数年にわたって天文学教育に携わってきた著者が、実際に受けた質問から一〇一問を選択し、その回答を簡潔に述べたQ&Aである。

東京大学出版会

「こころの時代」、漫画家は傲慢な歴史家になり、「それが人間だもの」的箴言もどきが横溢する。神、歴史、人間等かつて生の意味を形作った概念が廃墟なのは皆分かっていながら、その模造品が作られ続けている。偽物だから安心して消費できる、ということか?

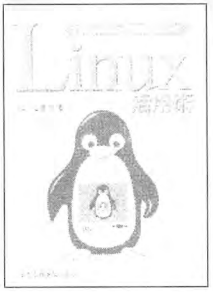
この時代がポストモダン後の諸国に共通なことをノルベルト・ボルツ『意味に餓える社会』（村上淳一訳、四六判、三六〇〇円）は言う。ベンヤミン研究や『批判理論の系譜学』（邦訳・法政大学出版局）等の著書で知られるボルツは、本書ではサッカー、テクノ、エコロジー等現代世相の細部を取り上げながら、その根元にある意味の飢餓を透視する、どこかブロッホの『この時代の遺産』を思わす手法をとる。

ただ、ボルツは意味の喪失を嘆くのではなく、意味の不在を何かのチャンスへと読み替えようとしているようだ。訳者が見事に再現した独特の文体を通して、このボルツの賭けが日本で持つであろう〝意味〟について、考えてみていただければと思う。

東京電機大学出版局

Ｌｉｎｕｘは、ヘルシンキ大学の学生だったライナス・トーバルズが独自に開発したＵＮＩＸ互換の無料ＯＳである。発表以来、世界中の優秀な技術者がインターネットを介し、新機能の追加やバグの修理等の製品開発を競って進めている。使いやすく安定性が高いため、ユーザ数は推定八百万人とも言われており、大学でも必須のツールとなっている。

▼松田七美男『学生のための情報活用シリーズ　Ｌｉｎｕｘ活用術』（一九〇〇円）インストールの仕方や最新情報ではなく、実際に活用するためのツールを紹介。Mule・LaTeX・Gnuplot・Tgif等、理工系学生が研究論文を作成する上で便利なものを取り上げ、設定から基本操作、知っていると便利な機能まで具体的な例を示しながら平易に解説した。



『学生のための情報活用シリーズ Linux活用術』
本体　1900円（税別）
A5版・172頁

東京農業大学出版会

▼『花ごころ』川添良子（二〇〇〇円）

和歌七百三十首収録の歌集。著者は、主婦で、「郷土」に所属している。詠い留めた年数は、三十年におよぶ。

作品は、最近十五年間のものの中から選び、年代順に並べてある。

著者はあとがきで、

「無職といわれる専業主婦としての、ごく普通のパターンの、一人の女の暮らしの中で刹那刹那を詠い留めてきた」

といっている。主婦ならではの、日々の生活の中での感覚、子供のこと、ふるさとのこと、家庭のことなど、さまざまな出来事を、草花、樹木、自然の観察を通して、詠いあげている。

人が生きていくということは、たいへんなドラマである。

それが一見たいへん平凡に見えても、そこには、苦悩、歓喜、驚愕、落胆、感動、悲哀などが、見事に展開されているものである。

それが一冊の歌集を通して、鮮明に甦ったといえる。

法政大学出版局

▼Ｒ・Ｈ・リーバーマン著／鈴木依子訳『スタインウェイ物語』……五六〇〇円

あらゆるピアニストにとってのあこがれであり、ステータスでもあるスタインウェイ――この「不滅の楽器」を造り、販売し、演奏し続けた人びとが奏でる産業と芸術のコンチェルト。

一八三五年のドイツに始まり、現代のアメリカまで、一八五〇年代の不況と一八九〇年代の金融暴落をくぐり抜け、破産状態と信じ難いまでの繁栄をともに経験し、五世代・六家族に引き継がれてきたファミリー・ビジネスの歴史は、アメリカにおける移民の暮らしを、職人の手わざの極致を、労働問題を、戦争とのかかわりを描き、ヤマハとの軋轢を語って日米経済摩擦におよぶ。四六判六一〇頁

1836年製のスタインウェイのピアノ。メトロポリタン美術館に貸与されている。

放送大学教育振興会

▼平成十一年三月刊行予定の放送大学印刷教材（開設改訂科目）七十一点の編集作業は、今たけなわ。主任講師・分担執筆者合わせて約二八〇名、編集担当者約四〇名が、資料収集・原稿執筆、原稿回付・校正にと、大わらわの毎日である。

▼放送大学授業科目別受講者数ランキング（平成十年度第二学期。カッコ内は受講者概数：単位百名。外国語を除く。）①心理学入門(47)、②カウンセリング(27)、③日本の自然(25)、④児童の臨床心理(25)、⑤人格心理学(23)、⑥日本の文化と思想(23)、⑦保健体育(22)、⑧人生の哲学(20)、⑨臨床心理学(20)、⑩病気の成立ちと仕組み(20)、⑪哲学入門(20)、⑫精神分析学(19)、⑬老年期の心理と病理(18)、⑭認知心理学(17)、⑮発達心理学(17)、⑯現代の精神保健(17)、⑰乳幼児の健康科学(17)、⑱老年期の健康科学(17)、⑲母性の健康科学(16)、⑳看護学概論(16)……と続いている。

▼恒例の『一九九九　ジャンル別目録放送大学テキスト』●人文系・外国語、●社会系・外国語、●自然系・外国語、の三分冊を作成。全点全章見出し付き。

明星大学出版部

▼児玉九十・児玉三夫共著改訂版『明星ものがたり』（本体一五〇〇円）本書は学校法人明星学苑の初代学苑長児玉九十、二代目理事長児玉三夫が語る明星学苑の創設から現在までの変遷を記録したものである。これまで学内の機関誌や記念誌などに掲載されていたものに社会情勢の変化を追録し、時代の変動に翻弄される教育現場で、明星学苑が掲げる教育理念の普遍性をいかに子ども達に伝えていくかを力説する。明星学苑に集うものの必携書。

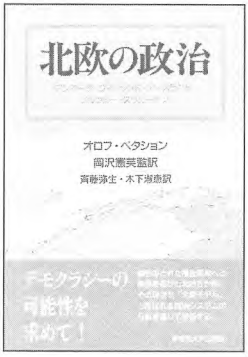
特に明星学苑が行う「凝念」についてのおこりと意味を詳しく解説。「凝念」の「凝」とは一点集中の意、「念」は観念の念で心のはたらきをいう。つまり心のはたらきを一点に集める、精神統一のこと。明星学苑に学ぶ生徒は授業前に「凝念」の姿勢で教師を待つ。同じように幼稚園児には「みなしずか」として精神統一を指導。喧噪の時代に心をみつめる教育として関係者に再確認されている。このように「凝念」は明星学苑の幼稚園、小学校、中学校、高等学校まで一貫して「生きる力」を育む教育を行う。

早稲田大学出版部

▼〈シリーズ比較家族第Ⅱ期〉の配本を開始した。①『扶養と相続』（奥山恭子・田中真砂子・義江明子編、三八〇〇円）は介護や遺産相続を中心に、高齢化社会の家族の生き方を考察する。②『父親と家族』（黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司編、三八〇〇円）は少子化が進むいま、家庭における父親の役割を検証する。

▼〈シリーズ高齢社会とエイジング（全8巻）〉第五回配本、⑦『高齢者の保健と医療』（柄澤昭秀編、二六〇〇円）老年病の予防や治療法を紹介し、高齢者のための保健と医療のあり方を考える。

▼『北欧の政治』（O・ペタション／岡沢憲芙監訳、二八〇〇円）北欧五か国の政策を支える独特な政治システムを分析し、福祉国家の現状を多角的に捉える。



名古屋大学出版会

▼D・ハウンシェル著／和田一夫他訳『アメリカン・システムから大量生産へ 1800～1932』（二六〇〇円）大量生産はいかにして生まれたのか。フォーディズムにいたる展開をヴィヴィッドに描く。

▼御崎加代子著『ワルラスの経済思想―一般均衡理論の社会ヴィジョン―』（四八〇〇円）思想としてのワルラス経済学の全体像を解明し、純粋理論研究にも新生面を切り拓いた力作。

▼植村博恭・磯谷明徳・海老塚明著『社会経済システムの制度分析―マルクスとケインズを超えて―』（三五〇〇円）資本主義経済の多様性と可変性を解明するべく制度分析を再構築したテキスト。

▼塩見治人・堀一郎編『日米関係経営史―高度成長から現在まで―』（三六〇〇円）グローバル競争における日米企業の相互作用を通して、二〇世紀後半の産業発展のダイナミズムを展望した共同論集。

▼M・ウェーバー著／肥前栄一他訳『ロシア革命論Ⅱ』（八〇〇〇円）ウェーバーによる全く新しいロシア革命論。法社会学的視点に立脚した鋭利な分析は、今日的な示唆に富む。

京都大学学術出版会

▼『〈地域間研究〉の試み』上巻・高谷好一編著・四二〇〇円／従来の地域研究においても「比較～論」という言葉はあった。しかし、特定の事象を取り上げた比較を積み重ねるだけで、個々の地域の全体像は浮かび上がるのだろうか？　地域研究の第一人者たちが、自らの個別地域研究を大胆に見直し、地域の総体として他の地域を比較しようと試みる。地域をまたいで理解する論理（それも一つではない）を見出し、各々の地域の外郭と実質を浮かび上がらせようとする意欲作。文部省重点領域研究の成果を基礎とした研究者必読の書。

▼『材料強度の基礎』高村仁一著・五〇〇〇円／材料の強度を決定する金属結晶中の格子欠陥とは何か？　その評価と測定の方法は？　材料物理学の泰斗・故高村教授による決定版教科書。

▼『動物個体群の生態学』内田俊郎著・四八〇〇円／動物の個体群における密度効果、寄主・寄生者関係、同一種内における多型性の発現などの問題を、著者自身がおこなった実験と野外調査に基づいて、実証的に論述する。

大阪経済法科大学出版部

▼長谷川正安・円羽徹編『自由・平等・民主主義と憲法学』〈法学研究所研究双書4〉（五六〇〇円）本書は、戦後の憲法運動を理論的に担ってきた一人である長谷川正安氏が本学を退職されるのを期して企画出版された。

「勉強すること、こんな楽なことはない。五〇年もやっているんだから。」と語られ、いまも健勝な先生に対し、前任校の名古屋大学や本学をとおして関係する各執筆者を中心に様々なテーマで論究する。

▼岩崎允胤著『現代の文化・倫理・価値の理論』（三〇〇〇円）本書は文化・倫理・価値の三つの篇からなる。各篇において、原理論・総論から、核兵器、日米安保条約、環境問題、生命科学等に到るまで論究は多岐に及ぶ。その基底には、人間とその生の尊厳への著者の熱い思いがある。その理念を著者は、人類の今日の課題の解決に最もよくかかわるような、人間的価値の根底をなし、それらの諸価値を諸価値たらしめる原理であり基準なのである、と語る。

▼近づく二一世紀へ向け、憲法・哲学という根本的なテーマの二つの著作である。

大阪大学出版会

▼堀 正二・松田 暉監修／是恒之宏編集『内科医のための心臓移植ハンドブック』（A5判・八〇〇〇円）。心臓移植医療を日本に定着させるために必要な、循環器内科医の意識改革に寄与する一書。

本書では、移植の実際、適応の判定基準などにかんする解説とともに、適応症例を提示することで、より具体的に心臓移植の実態と移植医療における循環器内科医の位置づけを理解できるように、様ざまな工夫がなされている。

▼五十嵐徳子著『現代ロシア人の意識構造』（A5判・六〇〇〇円）。ソ連崩壊という大きな社会的変動のなかで、ロシア人はなにを考え、なにをしようとし、また、どこへ向かおうとしているのか。本書ではその答えを、既存のデータからだけでなく、著者が現地で行った社会調査の結果から、統計学的手法によって分析し導き出している。

調査の項目は、経済・政治・社会・宗教と文化・ロシア人のアイデンティティなど多岐に亘る。また、文献に見られるロシア人の国民性と著者が行った意識調査の結果との関係についても考察する。

関西大学出版部

▼津川正幸著『近世日本海運の諸問題』（二八〇〇円）河村瑞賢が東廻り・西廻り航路を開発したことで、物資の大量輸送は大半、海運が担うことになる。他方、海難事故の多発で荷主たちは江戸十組問屋を結成し、事故防止と管理監督に乗り出した。特に、発生した海損を公正に処理することは大問題であった。本書には、ほかに北前船経営の切り出制の一例も収める。▼眞鍋俊二著『現代独米関係論』（二八〇〇円）本書は、日本とドイツの対米関係構造の比較研究を目的とする。第二次大戦後からドイツ統一に至る時期を対象に、ドイツの対外関係構造における対米関係について検討する。従来の日米関係論を回顧するとともに、新時代の日米関係論を再構築する際の基礎的参考文献ともなる。▼神保一郎著『動学的一般均衡理論研究』（三五〇〇円）本書では、静学的生産の理論、貯蓄を含んだ消費理論を議論したのち、価格が固定された経済の動きを論じる。こうした静学的理論を基礎として、動学的一般均衡論ではターンパイク定理、環境問題の影響、価格の成長経路への効果を分析する。

九州大学出版会

▼〈アジア太平洋センター研究叢書〉

[4]松原宏編著『アジアの都市システム』（A5判・三五〇頁・三四〇〇円）アジアの都市間競争のゆくえ、首都への一極集中に対する地方都市の戦略など、都市間関係の解明に迫る国際共同研究の成果。[5]塩次喜代明編著『地域企業のグローバル経営戦略―日本・韓国・中国の経営比較―』（A5判・三〇四頁・三二〇〇円）北部九州の地域企業の国際化を、韓国・中国の同様な企業の国際化と比較し、新しい事業展開を目指した国際経営戦略を展望する。〈同叢書・既刊〉[1]小川雄平編著『タイの工業化と社会の変容―日系企業はタイをどう変えたか―』（A5判・一五八頁・二八〇〇円）。[2]丸山孝一編著『現代タイ農民生活誌―タイ文化を支える人びとの暮らし―』（A5判・二四〇頁・三二〇〇円）。[3]矢田俊文・朴仁鎬編著『国土構造の日韓比較研究』（A5判・四四〇頁・五〇〇〇円）。▼ジャン・パウル／恒吉法海訳『ヘスペルスあるいは四十五の犬の郵便日』（A5判・七一二頁・一二〇〇〇円・九七年四月刊）本年度第三五回日本翻訳文化賞受賞。

東北大学出版会

▼森芳三著『昭和初期の経済更生運動と農村計画』（A5判三二四頁・五〇〇〇円）昭和初期の農山漁村経済更生運動を扱った著者の一連の研究を集大成したものである。昭和初期は巨大な変転の時期であり、「非常時」の時局であった。この状況で、重要な政治経済的役割を担った運動が農村経済更生運動である。運動の核ともいうべき位置に、農村計画が据え置かれていた。村民側の自力更生運動と政府側の政策である経済更生計画とが結びついて展開されることになった経済更生運動を周到な資料調査にもとづき実証的に分析する。

▼大内清昭・佐藤春彦監修『油性抗癌剤を用いた肝細胞癌の治療―SMANCS動注療法検討会編』（B5判一一四頁・三〇〇〇円）東北地方の基幹病院における本治療法の使用経験を持ち寄りその効果と問題点を検討し、さらに肝癌の病態をも広く勉強することを目的として開催された5回の検討会の内容をまとめた。

▼小林久三（作家）、山田みづえ（俳人）らのエッセイを載せた会報「宙」4号が発刊されました。

流通経済大学出版会

▼坂内誠一著『江戸最初の時の鐘物語』（四六判・二〇〇頁・二五〇〇円）

本書は、今年一月小会発行の『江戸のオランダ人定宿　長崎屋物語』の連作であり、十七世紀初期に、当時の江戸日本橋本石町（ホンゴク）三丁目に建設された「石町（コク）の時の鐘」を主題としてとりあげている。「石町の時の鐘」と「長崎屋」は、やはり当時の鐘撞新道を隔て至近の距離にあって十七世紀初期から十九世紀中期頃までの約三世紀の間併存し、江戸の中心街の歴史を織り成していたようであるが、その実像は長崎屋と同様不明の部分が多く残されているという。

著者は、この「石町の時の鐘」について多くの史料をもとにその建設の時期、場所、規模と外観、鐘の音や音色などについて明解に推理している。又、随所に、当時の時刻の知らせ方や鐘にまつわる説話やエピソードを織りまぜている。

平賀源内や吉田松陰などが小伝馬町の牢屋敷でこの鐘を聞いたであろう下りや大内良雄ら赤穂浪士四十七士がこの鐘の音を合図に行動を起した話など読者の興味はつきない内容である。

三重大学出版会

▼石田正昭編『食と農』（A5判・一五〇頁・一三二三円）本書は三重大学共通教育（一年次後期）に開講される総合科目「食と農」の教科書である。冒頭に総合科目の主催者が行う一回のガイダンス、末尾に一回のまとめを入れて、合計十五回（講師十三人）の講義に対応するかたちで編集されている。また講義担当者は生物資源学部、人文学部、教育学部の教官及び外来講師で編成されており、「食と農」が人文科学、社会科学、自然科学の各方面から探求されるよう工夫されている。

▼玉置維昭著『折々の記』（A5判・一七六頁・二六二円）著者の退官記念パーティー用に書かれた随筆集。昭和五十年十月、三重大学工学部教授に就任した著者が、平成十年三月までの二十二年六ヶ月に及ぶ三重大学生活の四季折々を綴ったもの。工学博士である著者はこの随筆集の執筆のために「自分史の書き方教室」に通い、随筆家の手ほどきを受けてこの著作を準備した。各章ごとに配置された多数のカット、表紙のイラストもまた著者の意匠を用いたものである。

新刊案内 '98・10～'98・12

■北海道大学図書刊行会
ストック経済のマクロ分析―価格・期待・ストック―　久保田義弘　六〇〇〇円
壊血病とビタミンCの歴史―「権威主義」と「思いこみ」の科学史　K・J・カーペンター／北村二朗・川上倫子訳　二八〇〇円
美術は呼吸する　北海道教育大学公開講座委員会編　二六〇〇円
ことばについて考える　北海道大学放送教育専門委員会編　一六〇〇円
The Adrenal Chromaffin Cell- Archetype and Exemplar of Cellular Signalling in Secretory Control　菅野富夫・中里幸和・熊倉鴻之助編著　一三〇〇〇円

■聖学院大学出版会
「宇魂和才」の説―二十一世紀の教育理念―　大木　英夫　二四〇〇円

■慶應義塾大学出版会
イギリス中世・チューダー朝演劇事典　松田隆美編著　六〇〇〇円
日本における西洋医学の先駆者たち　J・パワーズ／金久卓也他訳　三八〇〇円
法体系の概念―法体系論序説　第2版―　J・ラズ／松尾弘訳　四八〇〇円
地方自治の実証分析　日米韓3カ国の比較研究　小林良彰編著　三五〇〇円
アカデミックライティング入門　英語論文作成法　磯貝　友子　二〇〇〇円
レポート・論文の書き方　上級　櫻井　雅夫　一八〇〇円
心の健康を求めて　現代家族の病理　牛島　定信　二三〇〇円
禁衛府の研究　幻の皇宮衛士總隊　藤井　徳行　四〇〇〇円
KEIO SFC REVIEW NO. 3　慶應義塾大学湘南藤沢学会編　一四二九円
21世紀の医学―最先端技術と人に優しい医療―　北島政樹・永田守男編　二三〇〇円
大都市圏工業集積の実態分析　渡辺　幸男　四〇〇〇円
近代国家の再検討　鷲見誠一・蔭山宏編　二六〇〇円
政治・社会理論のフロンティア　田中宏・大石裕編　二八〇〇円
日本政治の構造と展開　笠原英彦・玉井清編　二六〇〇円
地域研究と現代の国家　富田広士・横手慎二編　二八〇〇円
冷戦後の国際政治―実践・政策・理論―　添谷芳秀・赤木完爾編　二五〇〇円
政治学科百年小史　池井　優　二〇〇〇円

■産能大学出版部
最高のホテルマンは「満足と感動」を売る　二見　道夫　一五〇〇円
新・クレジットビジネス　（社）全国信販協会企画編集　佐藤元則著　二四〇〇円
カイゼンで5Sの徹底　日本HR協会編　二〇〇〇円
花王丸田芳郎・最強のマーケティング　土平　恭郎　一六〇〇円
「快脳習慣」で道は開ける　見山　敏　一五〇〇円
マーケティングのための多変量解析　清水　功次　二〇〇〇円
小さな会社の資金繰りのノウハウ　上村　惇夫　一八〇〇円
マーケティング・ソリューション　谷口　正和　一五〇〇円

■専修大学出版局
アメリカの黒人底辺層　大河内俊雄　二二〇〇円
帝人事件　別巻一　専修大学今村法律研究室編　四一七五円
■玉川大学出版部
能のおもて　中西　通　七五〇〇円
変わるニッポンの大学―改革か迷走か―　苅谷　剛彦　二五〇〇円
生涯学習の社会学　赤尾　勝己　三八〇〇円
工学教育論―理念と実践の基礎研究―　王沛民・顧建民・劉偉民／関正夫・大塚豊編訳　九五〇〇円
溶ける家族と子どもたち　小川　信夫　二〇〇〇円
数学と哲学との間　村田　全　七六〇〇円
プロフェッショナルスクール―アメリカの専門職養成―　山田　礼子　四〇〇〇円
■中央大学出版部
学生はいかにして法律家となるか　―日本の法曹とイギリスのロイヤー―　住吉　博　四二〇〇円
震災と都市―阪神大震災をめぐって―　シンポジウム研究叢書編集委員会編　二四〇〇円
読む―時代の風音―　中村　達也　一八〇〇円
ユートウピアと千年王国―思想史的研究―　田村　秀夫　二五〇〇円
■東海大学出版会
自己決定権と死ぬ権利　立山　龍彦　二二〇〇円
テロリズム―変貌するテロと人間の安全保障―　東海大学平和戦略国際研究所編　一八〇〇円
21世紀を知るためのKEY WORD 100―人間学の新たな創造―　東海大学教養学部30周年記念論集編集委員会編　二〇〇〇円
30のキーワードで学ぶ現代経営　犬田　充編　二〇〇〇円
ハウジングプロジェクト・トウキョウ　都市環境構成研究会編　二四〇〇円
ブラックホールは宇宙を滅ぼすか？　―知りたかった天文・宇宙101の疑問―　メラニー・メルトン／中村浩美訳　一四〇〇円
波浪の解析と予報　磯崎　一郎　三五〇〇円
失われ行く森の自然誌―熱帯林の記憶―　大井　徹　二五〇〇円
■東京大学出版会
東京大学〈東京大学公開講座67〉　二六〇〇円
The Universe of English Ⅱ［テキスト＋CD4枚］　東京大学教養学部英語部会編　三八〇〇円
古代荘園図と景観　金田　章裕　六四〇〇円
中世東国の太平洋海運　綿貫　友子　九二〇〇円
生涯学習と社会参加―おとなが学ぶことの意味―　佐藤　一子　二五〇〇円
医療経済学　漆　博雄　四〇〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇105　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇140　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
大日本史料　第十二編之四十一　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本近世史料　諸宗末寺帳上・下セット　東京大学史料編纂所編　一八〇〇〇円
20世紀システム6　機能と変容　東京大学社会科学研究所編　三八〇〇円
情報化とアジア・イメージ　情報社会の文化1　青木保・梶原景昭　二七〇〇円
東京大学コレクションⅧ　博士の肖像　―人はなぜ肖像を残すのか―　木下直之編　三〇〇〇円
みの虫　大内　力　三〇〇〇円
物語の中世―神話・説話・民話の歴史学―　保立　道久　五六〇〇円
国際法社会学の理論―複雑システムとしての国際関係―　廣瀬　和子　五二〇〇円
韓国現代政治　森山　茂徳　二六〇〇円

ウクライナ・ナショナリズム―独立のディレンマ―　中井　和夫　七二〇〇円
日本の公務員給与政策　西村　美香　四五〇〇円
日本の犯罪学　所一彦・星野周弘・田村雅幸・山上皓編
7　一九七八―九五　Ⅰ原因
8　一九七八―九五　Ⅱ対策　七八〇〇円
会社法の経済学　三輪芳朗・神田秀樹・柳川範編　七八〇〇円
年代測定概論　兼岡　一郎　四八〇〇円
地球鉱物資源入門　飯山　敏道　四〇〇〇円
ホヤの生物学　佐藤矩行編　三五〇〇円
バイオメカニズム―ヒトの機能の評価と支援―　バイオメカニズム学会編　五二〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和編106　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和編142　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
大日本史料　第十二編之四十二　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
講座社会学1　理論と方法　高坂健次・厚東洋輔編　三〇〇〇円
講座社会学12　環境　舩橋晴俊・飯島伸子編　二八〇〇円
イデアとエピステーメー―プラトン哲学の発展史的研究―　天野　正幸　一六〇〇〇円
意味に餓える社会　ノルベルト・ボルツ著／村上淳一訳　三六〇〇円
古代文学表現史論　多田　一臣　六四〇〇円
中世文学年表―小説・軍記・幸若舞―　市古　貞次　六八〇〇円
丸山眞男講義録　第七冊　日本政治思想史　一九六七　丸山　眞男　三六〇〇円
現代日本の国家と市場　―石油危機以降の市場の脱〈公的領域〉化―　内山　融　五四〇〇円
別件逮捕・勾留の研究　川出　敏裕　五六〇〇円
日本の競争政策　後藤晃・鈴村興太郎編　四四〇〇円
生命と情報―分子遺伝学入門―　渡辺雄一郎　二八〇〇円
生命と物質―生物物理学入門―　永山　國昭　二八〇〇円
強磁性―多体電子論Ⅰ―　青木秀夫・草部浩一　三八〇〇円
身体計測による発育学　東郷　正美　六八〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録　昭和篇107　国立国会図書館所蔵　一四〇〇〇円
帝国議会衆議院委員会議録　昭和篇143　国立国会図書館所蔵　一八〇〇〇円
大日本史料　第十二編之四十三　東京大学史料編纂所編　一二〇〇〇円
大日本古文書　編年文書之十三―十八　東京大学史料編纂所編　一三〇〇〇円

■東京電機大学出版局

水圏の環境　有田正光編著　三四〇〇円
第一級陸上無線技術士試験問題集〈合格精選300題〉　吉川　忠久　二六〇〇円
科学技術史―電気・電子技術の発展―　直川　一也　二七〇〇円
基礎テキスト　電気理論　間邊幸三郎　二五〇〇円
Linux活用術〈学生のための情報活用シリーズ〉　松田七美男　一九〇〇円
PostScript & Acrobat／PDF　トーマス・マーツ／広田健一郎訳　五五〇〇円
マニュアルが教えないMFC　矢野　越夫　五二〇〇円
教養天文学―重力に支配される宇宙―　足立　暁生　一九〇〇円
QS-9000 第3版 TE補填規格―機械類の信頼性・保全性国際品質規格―　髙林　貞夫　二八〇〇円

■東京農業大学出版会

花ごころ　川添　良子　二〇〇〇円

■法政大学出版局

世界なき人間―文学・美術論集―

G・アンダース／青木隆嘉訳　三七〇〇円
危険社会―新しい近代への道―
U・ベック／東　廉・伊藤美登里訳　四七〇〇円
愛の文化史・上下―ヴィクトリア朝から現代へ―
S・カーン／斎藤九一・青木健訳　上三三〇〇円・下三八〇〇円
ドイツ政治哲学史―ヘーゲルの死より第一次世界大戦まで―
H・リュッベ／今井道夫訳　三五〇〇円
近世農業労働構成論〈森嘉兵衛著作集／第六巻・第九回配本〉
森　嘉兵衛　一四〇〇〇円
パンと競技場―ギリシャ・ローマ時代の政治と都市の社会学的歴史―
P・ヴェーヌ／鎌田博夫訳　九五〇〇円
十七世紀イギリスの民衆と思想〈C・ヒル評論集Ⅲ〉
C・ヒル／小野功生・圓月勝博・箭川修訳　五七〇〇円
森林Ⅱ〈ものと人間の文化史53―Ⅱ〉　四手井綱英　二八〇〇円
マレーシアの経済発展と労働力構造―エスニシティ、ジェンダー、ナショナリティ―　吉村　真子　五七〇〇円
秩序問題の解明―恐慌における人間の立場―　左古　輝人　二八〇〇円
スタインウェイ物語
R・H・リーバーマン／鈴木依子訳　五六〇〇円
最終解決　G・アリー／山本尤・三島憲一訳　四七〇〇円
もち（糯・餅）〈ものと人間の文化史89〉　渡部忠世・深澤小百合　二八〇〇円

■放送大学教育振興会

■明星大学出版部
明星ものがたり［改訂版］　児玉九十・児玉三夫　一五〇〇円

■早稲田大学出版部
北欧の政治―デンマーク・フィンランド・アイスランド・ノルウェー・スウェーデン―　O・ペタション、岡沢憲芙監訳　二八〇〇円
高齢者の社会学［新装版］　I・ロソー、嵯峨座晴夫監訳　三六〇〇円
シェークスピアをめぐる航海［新装版］　大井　邦雄　三六〇〇円
精選　中村星湖集［限定三〇〇部］　紅野敏郎編　二〇〇〇〇円
シリーズ高齢社会とエイジング（全8巻）第5回配本／第7巻
高齢者の保健と医療　柄澤昭秀編　二六〇〇円
シリーズ社会経済史第9巻
イギリスの製鉄業―一七〇〇―一八五〇年―
J・ハリス、武内達子訳　一八〇〇円
シリーズ比較家族第Ⅱ期第1・2回配本／第1・2巻
扶養と相続　奥山恭子・田中真砂子・義江明子編　三八〇〇円
父親と家族―父性を問う―
黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司編　三八〇〇円
平和研究第23号　特集　再び自律と平和―沖縄が提起する問題―
日本平和学会編　三二〇〇円
スポーツ法の理念とスポーツ事故問題〈日本スポーツ法学会年報第5号〉
日本スポーツ法学会編　四五〇〇円

■名古屋大学出版会
アメリカン・システムから大量生産へ　1800～1932
D・ハウンシェル／和田一夫他訳　六五〇〇円
ワルラスの経済思想―一般均衡理論の社会ヴィジョン―
御崎加代子　四八〇〇円
社会経済システムの制度分析―マルクスとケインズを超えて―
植村博恭・磯谷明徳・海老塚明　三五〇〇円
日米関係経営史―高度成長から現在まで―
塩見治人・堀一郎編　三六〇〇円
ロシア革命論Ⅱ　M・ウェーバー／肥前栄一他訳　八〇〇〇円

■京都大学学術出版会
弁論集1〈西洋古典叢書Ⅰ―14〉
イソクラテス／小池澄夫訳　三二〇〇円
動物個体群の生態学　内田　俊郎　四八〇〇円
材料強度の基礎　高村　仁一　五〇〇〇円
〈地域間研究〉の試み（上巻）　高谷好一編著　四二〇〇円

Analytical Background of Geomechanical Phenomena　赤井　浩一　四〇〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

自由・平等・民主主義と憲法学〈法学研究所研究双書4〉　長谷川正安・丹羽徹編　五六〇〇円

現代の文化・倫理・価値の理論　岩崎允胤著　三〇〇〇円

■大阪大学出版会

現代数学序説（Ⅱ）　川久保勝夫・宮西正宜編　二三〇〇円

永遠のロマンチシズム―シェイクスピア、チシアンそしてロマン派―　山川鴻三著　一〇〇〇〇円

■関西大学出版部

動学的一般均衡理論研究　神保　一郎　三五〇〇円

近世日本海運の諸問題　津川　正幸　二八〇〇円

構造変化と利潤率　佐藤　真人　四八〇〇円

現代独米関係論　眞鍋　俊二　六〇〇〇円

■九州大学出版会

アジアの都市システム〈アジア太平洋センター研究叢書4〉　松原　宏編著　三四〇〇円

地域企業のグローバル経営戦略―日本・韓国・中国の経営比較―〈アジア太平洋センター研究叢書5〉　塩次喜代明編著　三二〇〇円

視点の多様性〈九州産業大学公開講座14〉　楠本美智子　一〇〇〇〇円

近世の地方金融と社会構造　二〇〇〇円

ヘルス・コミュニケーション―これからの医療者の必須技術―　P・G・ノートハウス&L・L・ノートハウス／信友浩一・萩原明人訳　三八〇〇円

国内新体制を求めて―両大戦後にわたる革新運動・思想の軌跡―〈長崎純心大学学術叢書3〉　塩崎　弘明　三八〇〇円

法思想の伝統と現在―三島淑臣教授退官記念論集―　八〇〇〇円

地域経済の視点―筑後川流域圏の経済社会と住民生活―　駄田井　正・鶴田善彦・浅見良露編　二二〇〇円

ケリー・ニュートンの会計政策論　ケリー・ニュートン／大石桂一訳　三五〇〇円

カント『純粋理性批判』の再検討　香川　豊　五〇〇〇円

生意気盛り　ジャン・パウル／恒吉法海訳　九四〇〇円

■東北大学出版会

昭和初期の経済更生運動と農村計画　森　芳三　五〇〇〇円

油性抗癌剤を用いた肝細胞癌の治療　SMANCS動注療法検討会編／大内清昭・佐藤春彦監修　三〇〇〇円

ミケランジェロの世界像―システィナ礼拝堂天井画の研究―　田中　英道　三二〇〇円

フォンターネの詩　藤田　賢　三五〇〇円

父　阿部次郎　大平千枝子　二二〇〇円

■流通経済大学出版会

日本の会社制度発達史の研究　吉田　準三　三五〇〇円

イギリスの地方政府　大塚　祚保　三六一九円

江戸最初の時の鐘物語　坂内　誠一　二五〇〇円

■三重大学出版会

食と農　石田正昭編　一三二三円

折々の記　玉置　維昭　二六二五円

◉製作の現場から　19

不思議なことば「本が好き」

▼この原稿を含めて、冬休みの宿題は多々あったのだけれど、毎年のことながらやる気になれない。大晦日はとうとう、紅白を最後まで見てしまった。

▼つくづく不思議な番組だと思う。歌の合間の、落ちが来る前に白けてしまうコント、歌の内容とはおよそマッチしない（あるいは、歌っている歌詞のみじめさに抵抗するような）絢爛豪華な衣装、そしてあらゆるジャンルの歌、とりわけ最近の歌番組ではほとんど聴くことのないド演歌の多さ――僕が高校生の頃から何ひとつ変わっていない。

▼別に、紅白を批判しようというのではない。視聴率が落ちたとはいっても比較の問題で、お化け番組であることに変わりはないから、NHKにしても、このスタイルを変えたくはないのだろう。ある意味では、趣味の多様化とか、個性の時代とかいうことばの内容の空疎さを、紅白はその視聴率によって笑い飛ばしているのかもしれない。

▼多様なジャンルの闇鍋的混沌ということに限れば、本の世界も変わりはない。大型書店に行ってみれば、そこには哲学書があり、小説があり詩集もある。辞典があり技術書があり、実用書や学参がある。漫画もあるし絵本もある。位置や大きさはさまざまだが、エロ本のコーナーもひっそりと存在している。

▼これらをひっくるめて、僕らは「本」と呼んでいる。紙に印刷され、表紙をつけて綴じてさえあれば、ジャンルも内容も問わない。誰も「本」だとは思っていないだろうけれど、字面だけからすればビニ本も裏本も「本」であることにちがいはない。

▼手本に由来するという古来の意味は措いて、現在では「本」というのは形を示すものであり、価値観を伴わない。にもかかわらず僕たちの世代の人間は、両親や先生たちから、本は大切にしなければならないと教えられたから、古くなったパソコンソフトのマニュアル、二度と読まないであろう推理小説など、ゴミにすぎないものでも、ちり紙交換に出すのは抵抗がある。

▼おそらく、たいていの人がそうだ。子どもの頃から無意識のうちに「本」は価値あるものと刷り込まれているから、履歴書の趣味の欄に「読書」と書けば、多少は知的な感じを与えるだろうと思っている。審査する方も、「趣味＝読書」に対して何も怪しまない。実際には、どんな本を読んできたかは、学歴や職歴以上にその人物を示すものであろうし、読んできた本によっては、組織にとって不適切であることの証明であるかも知れないのに。

▼当然、「本が好き」という言い方も、かなり曖昧である。「活字中毒者」なるものは確かに存在するようだが、誰もがそうではない。現に、物語の世界に浸って空想の翼を広げるのが好きなのを「本全般」が好きなのと勘違いして、大学出版部の編集者になってしまった男も存在する（すみません、僕のことです）。

▼本の未来を語るについても、「本全般」について何かを言うことはむずかしい。本は、「本」の一文字で括れるほど簡単な対象ではない。それは「本」の形に凝縮された、聖俗あわせ持つ「世界」に等しいからだ。「〈紙の本〉の手軽さ・便利さに勝るものはない／いや、これからはネット出版＆オンデマンドの時代だ／その前にマルチメディア化だ」と議論してみても、対象となる「本」の定義づけが明確でない限り、おそらく不毛でしかない。

▼本について語るなら、議論するなら、それは誰が読む本なのか、どこで読む本なのか、情報の鮮度がどれだけ重要視される本なのか、それ以前に、読む本なのか、図版や写真の比重の大きい見る本なのか、それとも検索し調べるための本なのか、何かを学ぶための本か楽しむための本か、本の持つさまざまな対象と機能の、どの部分について語り議論しようとしているのかを明確にしなければならないだろうと思っている。（紅白饅頭）

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060-0809 札幌市北区北９条西８丁目　北大構内 TEL. 011-747-2308　FAX. 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1－1 TEL. 048-725-9801　FAX. 048-725-0324
慶應義塾大学出版会	〒108-8346 東京都港区三田２－19－30 TEL. 03-3451-6926　FAX. 03-3454-7029
産能大学出版部	〒152-0035 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘昭和ビル TEL. 03-3724-9101　FAX. 03-5701-7499
専修大学出版局	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館 TEL. 03-3263-4230　FAX. 03-3263-4288
玉川大学出版部	〒194-8610 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 042-739-8935　FAX. 042-739-8940
中央大学出版部	〒192-0393 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351　FAX. 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151-8677 東京都渋谷区富ヶ谷2－28－4 TEL. 03-5478-0891　FAX. 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113-8654 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814　FAX. 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101-8457 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-5280-3433　FAX. 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-5477-2562　FAX. 03-5477-2643
法政大学出版局	〒102-0073 東京都千代田区九段北3－2－7 TEL. 03-5214-5540　FAX. 03-5214-5542
放送大学教育振興会	〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-14-1郵政互助会琴平ビル3F TEL. 03-3502-2750　FAX. 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191-8506 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 042-591-9979　FAX. 042-593-0192
早稲田大学出版部	〒169-0071 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551　FAX. 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-0814 名古屋市千種区不老町１ 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027　FAX. 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182　FAX. 075-761-6190
大阪経済法科大学出版部	〒581-8511 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211　FAX. 0729-41-9979
大阪大学出版会	〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内 TEL. 06-6877-1614　FAX. 06-6877-1614
関西大学出版部	〒564-8680 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-6368-1121　FAX. 06-6389-5162
九州大学出版会	〒812-0053 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515　FAX. 092-641-0172
東北大学出版会(準会員)	〒980-8577 仙台市青葉区片平2－1－1 東北大学構内 TEL. 022-214-2777　FAX. 022-225-2029
流通経済大学出版会(準会員)	〒301-8555 茨城県龍ヶ崎市平畑120 TEL. 0297-64-0001　FAX. 0297-64-0011
三重大学出版会(準会員)	〒514-8507 三重県津市上浜町1515 三重大学出版ホール内 TEL. 059-232-1356　FAX. 059-231-1356

大学出版(第40号)'99冬　平成11年1月10日発行　発行所／大学出版部協会
〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 東大構内 東京大学出版会内 電話03-3812-2111 (内)7956
E-MAIL: ajup@lian.com　URL: http://www.lian.com/AJUP/　頒布価格100円　〒共